復興曲線による災害復興研究(2)

震災から3年を迎える東日本大震災の被災地から

○宮本匠¹

(京都大学防災研究所)

キーワード：災害復興、復興曲線、インタビュー法

Longitudinal Disaster Revitalization Studies with a “Revitalization Curve” (2)

Takumi MIYAMOTO¹(¹Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University)

Key Words: disaster revitalization, Revitalization curve, interview methods

目 的

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から2年がたった。津波による大きな被害があった沿岸部では、未だ復興の先行きは見え、福島第一原子力発電所は依然予断を許さない状況におかれており、「復興は遅々として進んでいない」という声も聞かれる。一方で、高台移転のための用地確保が進んだりもしている。陸前高田市などではかさ上げされる土地に建っていた津波による被害を受けながらも辛うじて残っていた建物がいよいよ解体され、復興への道のりは少しずつではあるが近づいてきているようにも捉えることができる。しかし、被災者の中には、「すべての建物が解体されてしまって、今自分がどこに建っているのかわからない」というような感覚が残されたり、津波に襲われる前のまちなみの記憶を思い出すきっかけを失い、喪失感をより強めているという声も聞かれる。震災から2年を迎えた被災地において、被災者はこの2年間でどのように感じ、意味づけているのだろうか。

方 法

筆者はこれまで、東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県気仙沼市唐桑半島のある被災者のもとを訪問しながら、現地の被災者の声や復興過程を記述してきた。その際、エスノグラフィとともに、「復興曲線インタビュー」という独自のインタビュー手法によって、その復興過程を記述してきた。「復興曲線」インタビューとは、被災者にx-y座標の描かれたシートを提示し、横軸を地震から今までの時間、縦軸を被災者の気持ちの変化と位置づけ、その変化を表す曲線を描いてもらいながら進めるインタビュー手法である(Miyamoto & Atsumi, 2011)。本研究では、筆者が毎月訪問ながら交流を続けている唐桑半島のKさんに、震災から2年を迎える2013年3月9日に、復興曲線インタビューを実施し、2012年6月17日にKさんから伺った復興曲線インタビューの結果(図1)と比較することを試みた。

図1 Kさんが描いた第1回復興曲線(2012年6月17日)

結 果

Kさんに実施した第2回復興曲線インタビューの結果は、図2のとおりである。

図2 Kさんが描いた第2回復興曲線(2013年3月9日)

復興曲線インタビューで語られたことの中で印象的であったのは、「先が見えなくてしんどいのではなくて、先が見えてしんどい」という言葉だった。「一年前より、逆に気持ちは悪くなっている。具体的に示された、それに我々がのっていかねばならない。そうなると、意に沿わないことも出てくる。一年前は、毎日、毎日、充実した中で生きてきた。そんなこと考えなかった。」1年前のときは、ボランティアとの出会いが中心となって語られたのに対して、第2回ではそれと共に、具体化される生活再建の道筋に向き合うことの辛さが語られていた。

考 察

なぜ、復興の一端となる高台移転の用地確保や、解体の進捗が、そのまま被災者が前向きに生きていくことができることにつながらないのだろうか。発表時は、肥後(2003)の「めざす」関わりと「すごす」関わりの2軸を援用し、これらの論点をする。

引用文献

- 肥後功一 (2003). コミュニケーション障害を生み出す見方, 大石益男(編), コミュニケーション障害の心理, 同成社, pp. 19-38.
- Miyamoto, T. & Atsumi, T. (2011). Visualization of Disaster Revitalization Processes -Collective Constructions of Survivors' Experiences in the 2004 Niigata Chuetsu Earthquake, *Progress in Asian Social Psychology*, 8, pp. 307-323